ウクライナの主権をどう守るか

https://www.project-syndicate.org/commentary/russia-nato-security-through-ukrainian-neutrality-by-jeffrey-d-sachs-2022-02

ジェフリー・D・サックス

2022 年 2 月 22 日

「プロジェクト・シンジケート」

ロシアと NATO が成すべきこと

欧米の友人たちは、ウクライナの NATO 加盟の権利を守ることで、ウクライナを守っていると主張している。しかし、その逆も然り。理論上の権利を守ることで、ロシアの侵攻の可能性を高め、ウクライナの安全保障を危険にさらすことになる。ウクライナの独立は、オーストリア、フィンランド、スウェーデン（いずれも EU 加盟国だが NATO には加盟していない）のように、非 NATO 国としてウクライナの主権を保証するような外交協定をロシアとの間で結ぶことで、よりよく守ることができる。

具体的には、ロシアはウクライナ東部からの軍の撤退とウクライナ国境付近に展開している軍の動員に同意することだ。
そして NATO は、ロシアが主権を尊重し、ウクライナがロシアの安全保障上の利益を尊重することを条件に、ウクライナの NATO 加盟を放棄する。このような合意が可能なのは、それが双方の利益につながるからだ。

確かに、ウクライナの NATO 加盟を主張する人たちは、そのような合意はナイーブなものだと考えている。
彼らは、2014 年にロシアがウクライナに侵攻し、クリミアを併合したことを指摘する。
そして今回の危機は、ロシアがウクライナの国境に 10 万人以上の軍隊を集め、新たな侵攻を予告していることから生じたと指摘している。
これは、ソ連崩壊後にウクライナが保有していた巨大な核兵器を引き渡す代わ

りに、ロシアがウクライナの独立と主権（クリミアを含む）を尊重することを約束したブダペスト覚書（1994 年）に違反したもので、クレムリンはこの約束を破った。

ウクライナからのオファーはなかった

ロシアが中立的なウクライナを受け入れ、尊重する可能性はまだある。しかし、ウクライナからはその地位を得るためのオファーが一度もなかった。
2008 年、アメリカはウクライナ（およびグルジア）を NATO に加盟させることを提案した。それ以来、この地域にはその提案がつきまとっている。
フランス、ドイツをはじめとする多くの欧州諸国の政府は、米国の動きをロシアへの挑発と見なし、ウクライナへの NATO への即時招請を回避した。しかし NATO 首脳部はウクライナとの共同声明を発し、ウクライナが NATO 加盟国になる見通しを明確にした。

クレムリンから見れば、NATO がウクライナに進出することは、ロシアの安全保障にとって直接的な脅威となる。
ソ連の政治工学は、ロシアと欧米諸国を地理的に分離することを主眼としていた。ソ連崩壊後、ロシアは旧ソ連圏での NATO 拡大に強く反対してきた。確かに、プーチンの推論は冷戦時代のメンタリティの連続性を示しているが、そのメンタリティは双方ともにある。

冷戦の終わりと米国の一極支配

冷戦の特徴は、米ソのどちらが有利な体制を築くかという、地方や地域レベルでの代理戦争が繰り返されたことである。戦場は東南・中央アジア、アフリカ、西半球、中東と世界各地に移ったが、常に血みどろの戦いだった。

しかし、1992 年以降、ほとんどの政権交代戦争は、ソ連崩壊後に唯一の超大国であると確信していた米国が主導または支援している。NATO 軍は 1995 年にボスニア、1999 年にベオグラードを爆撃し、2001 年にはアフガニスタンに侵攻し、2011 年にはリビアを爆撃した。

米国は 2003 年にイラクに侵攻し、2014 年には親ロシア派のヴィクトル・ヤヌコビッチ大統領の退陣につながったウクライナでの抗議活動を公然と支援した。

もちろん、ロシアも政権交代作戦を実行した。2004 年にはウクライナに介入し、有権者への脅迫や選挙違反によってヤヌコビッチを支援したが、地元の組織や大衆の抗議活動によって最終的にはこれらの行動を阻止した。また、カザフスタンやベラルーシ（現在はプーチンの完全な支配下にある）など、周辺地域に友好的な政権を押し付けたり、支援したりし続けている。

しかし、ロシアと西洋の間の相互の反感と不信感は、はるか昔にさかのぼる。ロシアはその歴史の中で、西からの侵略を繰り返し恐れ（実際に耐え）、ヨーロッパは東からのロシアの拡張主義的試みを繰り返し恐れ、耐えてきた。それは長くて、悲しくて、血まみれの試練だった。

雪解けを台無しにした NATO の強化・拡大

双方の政治的な知恵があれば、ソ連崩壊後にこの歴史的な反感を解消することができたはずだ。1990 年代前半にはチャンスがあったのだが、それが無駄になってしまった。これには、NATO の拡大が始まったことが影響している。
1998 年、ベテラン外交官であり米ソ関係の歴史家でもあるジョージ・F・ケナンは、予見的かつ悲観的な発言をしていた。
「私はこれ（NATO の拡大）が新しい冷戦の始まりだと思う。最終的にはロシア人がかなり反発して、その政策に影響を与えると思う。痛恨の極みだ」と、彼は語った。
1994 年から 1997 年までアメリカの国防長官を務めたウィリアム・ペリーは、ケナンの意見に賛同し、クリントン政権での辞任を考えたほどだった。

どちらの側も、もはや無実を主張することはできない。一方を善人、他方を悪人として描くのではなく、双方の、そして世界全体の安全を確保するために何をすべきかに焦点を当てなければならない。
歴史的に見ても、ロシア軍と NATO 軍は国境を越えて対峙するよりも、地理的

に分離した状態を維持した方が良いと考えられる。1961 年のベルリン、1962 年のキューバなど、米軍とソ連軍が至近距離で対峙したときほど、ヨーロッパや世界が不安になったことはない。誰もが危険にさらされていた苦しい状況の中で、ベルリンの壁の建設は（非常に悲劇的ではあったが）安定剤として機能していた。

どこがセーフティ・ラインか

今日、私たちが最も関心を持つべきことは、ウクライナの主権とヨーロッパおよび世界の平和であり、NATO がウクライナに駐留することではない（もちろん、新たな壁を建設することでもない）。
ロシアがウクライナ東部から撤退し、国境に駐留している軍隊を動員解除する代わりに、NATO が東進をやめれば、ウクライナはより安全になるだろう。そのためには、EU や国連を巻き込んだ外交が急務である。

ジェフリー・D・サックス＝米コロンビア大学教授